



Title	法隆寺金堂壁画・山中羅漢図(一号大壁上)の原寸復元イメージの提案
Author(s)	松田, 真平
Citation	デザイン理論. 2004, 44, p. 172-173
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52906
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

法隆寺金堂壁画・山中羅漢図（1号大壁上）の原寸復元イメージの提案

松田真平／株ICD 現代デザイン研究所

1. 復元イメージ制作の目的

火災で失われた7世紀の名画を、将来日本画の手法で焼失直前の状態に再現するための元になる資料を、CG技術により、できる限り正確に作成することが主な目的である。

◎使用機器とソフト

〈機器〉 Macintosh G4Cube,
 〈ソフト〉 AdobePhotoshop5.0,
 Adobe Illistrator8.0.

2. サイズと素材について

平面（ロール紙にインクジェット出力）

縦〔左辺〕(72.8cm)×横(264.8cm)=原寸

上記サイズは、罹災前の金堂初層1号壁上の栱間壁で、縦は頭貫の上辺から一通肘木の下辺までの垂直距離、横は大斗間の水平距離。いずれも部材の規格寸法と柱間実測値（皿斗心=各々の柱の上に乗る大斗付皿斗の中心間距離）をもとに、法隆寺大鏡〔文献1〕所収の当壁画全体写真と照合しながら綿密に計算したものである。

現在の金堂は、昭和修理により柱間の直線上のずれや柱の傾きが補正されているため（竹島、1975〔文献2〕），この位置の壁につ

いては、修理前の金堂の壁に比べ縦が0.6cm、横が4.8cm程、長くなっている。そのため、現在の金堂で、この壁画の再現を試みようとした場合、原画の正しい大きさを厳密に守る立場に立てば、絵の周囲と部材の間に若干の余白が生じてしまう。もし、これを避けて、現在の壁の大きさにバランス良く収めることを再現の前提とするなら、もとの絵を少し（102%）拡大して模写画を作成する必要がある。

手順としては和紙に岩絵の具で描き、現在金堂の上層の小壁に貼り付けられている飛天模写（昭和46年完成）と同じような方法で、法隆寺から文化庁に現状変更の届け出を出してもらい、該当する壁に強力なボンドで貼り付けて復元することが望ましいと思われる。

3. 壁画のオリジナルについて

栱間壁の山中羅漢図18面は、昭和の初めの時点で、すでに図様が明らかなものが数面残るのみであったが、昭和24年の罹災後、絵の輪郭がわずかに残った壁（3号壁上や11号壁上など）もあるが、この最もよく知られた1号壁上の羅漢図については、火災の熱と消防

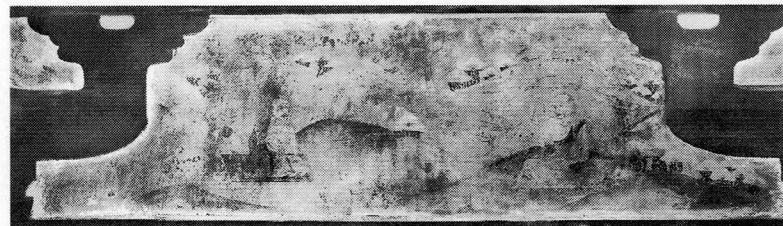


写真1 原寸復元イメージ（筆者による）

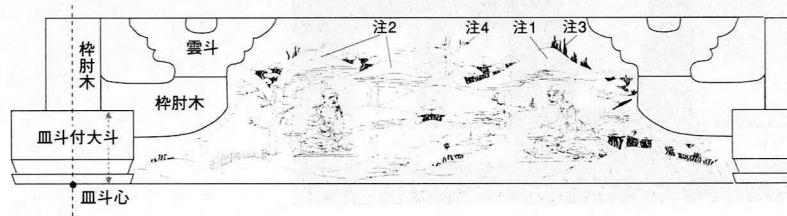


図1 描き起こし（筆者による）

ポンプの放水により、表層が殆ど完全に崩落し、細かく砕けてしまったことが報告されており、オリジナルの破片照合も未着手である。この壁について2、3の報文をここに引用しておくことにする。「火災で落ちたのは、二羅漢が対座する横長の壁の方が多い、現在極めて一部を残すのみ。[火災当日の状況]」(亀田、1949〔文献3〕)。「金堂に火災がおこり、羅漢のいる山景図もその後ほどなくくずれ落ちてあとかたもなくなった。」(田中、1958〔文献4〕)。「1号壁の上、上壁は全く剥げ、下壁が見えている。[火災2カ月後の調査]」(久野、1953〔文献5〕)。

4. 色と線の復元方法について

この羅漢図については、火災前の白黒写真や模写が複数あり、その概要を知ることができる。春山(1947)〔文献6〕に掲載されているカラー部分写真と明治と昭和の模写(桜井香雲と新井勝利)から色彩を判定し、羅漢の指先等、剥落の多い部分は、模写と写真を精査し、壁の質感を可能な限り拾い上げながらCGで復元を試みた。

5. 図様に関する知見

右側羅漢の右手は中指と親指をあわせており、持物は何も持っていない。敦煌・第97窟の第二尊者像の右手とほぼ同じ印相である(文献7、写真2)。左側羅漢は、左手を挙げ、右手も胸の前あたりまであげているが、桜井香雲の模写ではこの両手が省略されている。

背景の山の形は、右側は法隆寺付近から見た二上山の雄岳(前ページ下の図1の注1)の形に、左側はそれに連なる大和葛城山(同注2)の山並の形と似ている。背景の右側の山の稜線にそって、櫛状の樹の幹が並んで描かれていた痕跡もあり(同注3)、中央背景にある1本の樹木に、葉を散らした



写真2 敦煌第97窟 (文献7より)



写真3 敦煌第98窟 (文献8より)



写真4 敦煌第61窟 (五代907~960) (文献9より)

跡があることも確認できた(同注4)。

なお、この壁画の山岳表現を特徴づけるキノコ状の葉叢とS字状に彎曲した紅色の樹幹の形は、アカマツのイメージかと思われるが、中国の敦煌や朝鮮半島にそのルーツが見出され(写真3~5)、7世紀の百濟の山岳文博や、高句麗壁画にも類似する様式が見られる。羅漢の顔は中央アジア人風で、その様式がシルクロードを通じて西方から伝えられたことを物語っている。

文献

1. 『法隆寺大鏡』(別集1~4 金堂壁画) 1918 東京美術学校編.
2. 竹島卓一『建築技法から見た法隆寺金堂の諸問題』1975 中央公論美術出版.
3. 亀田孜「壁画災前災後」1949 仏教芸術3号.
4. 田中一松『法隆寺壁画』P.2 1958 平凡社.
5. 田中一松、島田修二郎、久野健. 法隆寺金堂 壁画の火災損傷について『美術研究』167号 P.74, 75, 79 (執筆:久野) 1953.
6. 春山武松『法隆寺壁画』1947 朝日新聞社.
7. PELLION, Paul『Les Grottes de Touen-Houang Tome3』1920 MISSION PELLION (Paris).
8. 百橋明穂「飛鳥・奈良絵画」『日本の美術』204号 1983 至文堂.
9. 樊錦詩・劉永増『〔敦煌石窟〕精選50窟鑑賞ガイド』2003 文化出版局.
10. シルクロード文明展カタログ 1988 奈良国立博物館.

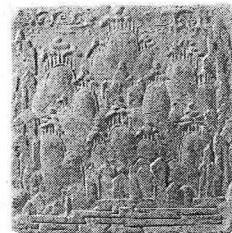


写真5 山岳文博 (文献10より)
三国時代・百濟(7世紀)
扶蘇都城岩面外里出土